

水の哲学

金子みすゞ 「水はすなお、 なんの影もうつす」

金子みすゞ（1903-1930）は山口県大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）出身の童謡詩人。3歳のときに父を亡くし、2歳下の弟が叔母の嫁ぎ先に養子に出される。16歳のときに叔母も亡くなり、母がその後釜として再婚する。

母の嫁ぎ先は下関で手広く書店を経営しており、女学校を卒業したみすゞも下関に出て店を手伝うようになる。20歳の頃に投稿した詩が「童話」、「婦人倶楽部」、「婦人画報」、「金の星」の4誌に一斉に掲載され、選者の西條八十から「若き童謡詩人の中の巨星」と激賞される。

1926年（大正15年）、店の番頭格の男と結婚し、娘をもうけるものの夫の放蕩で離婚を決意。娘の親権をめぐる争いとなり、1930年（昭和5年）3月10日に娘を母に託すことを願う遺書を遺して服毒自殺する。享年26歳の短い生涯だった。



すべてのものに命を吹き込む感性

みすゞの詩はその後ながく埋もれていたものの、児童文学者の矢崎節夫らによって1984年に遺稿集が出版され、たちまち有名になった。代表作の「私と小鳥と鈴と」は小学校の国語教科書に採用されている。

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

この詩のもっとも大きな特徴は「私」と「小鳥」と「鈴」が「みんなちがって、みんないい」というように一律に等置されていることだ。いわば「私」とおなじように「小鳥」も「鈴」も等しく

擬人化されている。そしてこれはみすゞの詩全体に共通する特徴でもある。

しかもこの擬人化は詩の技法としての意図を感じさせない。身のまわりのものすべてに命を吹き込むみすゞ本来の自然な資質に由来しているといっていだろう。

純粹経験の世界に

タイトルの「水はすなお、なんの影もうつす」は「水と影」という作品の一節。

お空のかけは、
水のなかにいっぱい。

お空のふちに、
木立もうつる、
野茨もうつる。
水はすなお、
なんの影もうつす。

水のかげは、
木立のしげみにちらちら。

明るい影よ、
すずしい影よ、
ゆれてる影よ。
水はつつましい、
自分の影は小さい。



ここでも「水」はたんなる客観的な対象ではなく、みすゞ風に自然に擬人化されている。いわばここでの「水」はひとつの人格をそなえている。

みすゞの感性には主体と客体の厳密な区別は存在しない。それは哲学者の西田幾多郎が『善の研究』で論じた主客合一の「純粹経験」の世界といっていものかもしれない。

捕鯨の風土に育まれた詩情

みすゞが生まれた仙崎村は江戸時代に有数の捕鯨地として栄えていた。捕獲した鯨が胎児を孕んでいたときは手厚く埋葬したという。鯨がたんなる捕獲物ではなく、命あるものとして人間との密接な共生関係にあったことを物語っている。

みすゞの作品にもある「鯨法会」はいまも絶えることなく同地で引き継がれているそうだ。すべてのものに命を見るみすゞの稀有な詩情はまさにこの風土で育まれた。（高倉）

参考文献

『金子みすゞ童謡集』ハルキ文庫
『童謡詩人 金子みすゞの生涯』JULA出版
『日本の童謡 誕生から90年の歩み』平凡社